様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2011～2015
課題番号：２３５２０８２８

研究課題名（和文）在地社会における「風説留」の史料学的研究

研究課題名（英文）A historical study of Documents Collection in the village

研究代表者
岩田　みゆき（IWATA, Miyuki）

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：４０３６５０１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：この研究は、幕末期の在地社会における「風説留」と総称される情報記録について検討したものである。江戸時代後期以降、在地社会では上層民らを中心に、多くの政治・経済・文化・対外情報が収集され、記録され、相互に情報交換も行われていた。本研究では、それらの情報記録の所在調査や複数の家の情報記録の内容の比較検討を行い、それぞれの特徴について明らかにした。また、豪農が記録した情報の一部を翻刻し報告書にまとめた。

研究成果の概要（英文）：This study is reserch about Documents Collection "FUSETU-DOME" in the village. In the end of the Edo period, village upper people collected many political, economic, cultural and diplomatic documents, and edited these documents.In this study,I carried out the whereabouts investigation of these documents and compared these contents,and reprinted the part of OKUBO documents.

研究分野：日本近世史

キーワード：風説留　情報　在地社会

１．研究開始当初の背景

研究の学術的背景　本研究に関連する研究は、１９８０年代より開始された情報研究の中にみることができる。「情報」という言葉が学界で通用するようになったのもこのころからのことであり、インターネットが普及しはじめた１９９０年代には『歴史学研究』625 で「情報と歴史学」という特集が組まれ、歴史学において情報研究が大きく取り上げられるようになり、関連研究も増加した。中でも大きな社会変革を実現した幕末維新期において、政治社会動向に大きな意味をもつものとして「情報」が注目され、宮地正人氏によって『幕末維新期の文化と情報』(1994 年)、『幕末維新期の社会的政治史研究』(1999 年)が発表され、理論的問題も含めた情報研究の方向性が打出された。そこでは、それまでそれぞれ別個に検討されていた幕府・諸藩・民衆（豪農商層）の三つのグループの情報収集活動についてその相互関係を意識した社会的政治史研究が提起され、中でも幕末維新変革を根底から突き動かしたものとして豪農商層の情報収集活動が注目された。研究代表者である岩田も、1980 年代からの研究をまとめた『幕末の情報と社会変革』（吉川弘文館）を 2001 年に発表した。2002 年には高部淑子氏によってそれまでの研究史が整理され（『歴史評論』630）、あらたな情報研究の方向性が模索されている。近年では、落合延孝氏による、旗本の地方役人を勤めた上野国那波郡連取村の森村新蔵明俊による風説留を中心に検討した『幕末民衆の情報世界』(2006 年)が出版され、岩下哲典氏による幕府・諸藩の情報活動を中心に記された『幕末日本の情報活動　改訂増補版－開国の情報史－』(2008 年)、太田富康氏による、川越藩領入間郡赤尾村名主林信海の情報収集を分析した『近代地方行政体の記録と情報』(2010 年）が出版されている。このように、幕末維新期における情報研究においては、扱う史料の違いもあり幕末政治史における幕府・諸藩の情報活動の研究と、豪農商層を中心とする在地社会の情報活動の研究に大きく分かれるのが現状である。しかし、いずれにしても幕府の極秘情報がどのように在地社会に漏洩していったのか、また村々が保有する異国船発見情報などの在地情報を幕府・諸藩がどのように吸収していこうとしたのかなど、その相互関係を意識しつつ研究は進められてきているといえよう。応募者は、既に『幕末の情報と社会変革』(2001 年)、『黒船がやってきたー幕末の情報ネットワーク』(2005 年)を出版し、在地社会における情報の問題を社会構造の変化という観点から追及してきた。そこでは、武州入間郡平山村斎藤家、下総国結城郡菅谷村大久保家など関東豪農の情報収集活動を扱い風説留類の大まかな内容と、収集に関わりを持った幅広い人間関係や、幕末政治情勢とのかかわりを中心に検討したが、風説留に集録された個々の情報の史料学的検討は今後の課題として残していた。ここでいう史料学的検討とは、例えば個々の情報の内容はもとより本来の作成者・差出人や宛名、集録までの経緯、また抜粋の場合には原典の探索と、抜粋部分の確認、筆写・記録の正確性などを追求することである。また、この十数年の間に各地の風説留類の発掘が進み個別研究は各地でみられるもののその数はまだ少なく、量的把握はできていない。さらにそれぞれの風説留の中の情報の比較研究は進んでおらず、個々の情報の内容・広がり方の普遍性と特殊性についての検討はなされていない。これらの点の追求なしに在地社会の情報の実態を明らかにしたことにはならないであろう。また、ここ数年応募者がすすめてきた沿岸諸村の情報伝達、特に海防問題とのかかわりの中での情報伝達の実態をみると、内陸部と、はやくから異国船問題にかかわりをもった沿岸部とではペリー来来航時の情報伝達のあり方や情報収集者の意識に違いがみられ、地域性という観点からの情報の検討も必要と考えた。

２．研究の目的

本研究は、幕末維新期に全国的に開花した、在地社会における政治・経済・文化・対外情報の集積である風説留及びそれに類する情報記録の所在調査を実施し、さらにその収集された情報を史料学的に検討し、情報の内容・量・収集の速度・情報ルート、情報収集の主体・目的・人間関係、地域性などを明らかにすることによって、身分制の枠を超えた幕末維新期の在地社会における情報伝達・情報収集の実態と特色を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

本研究では、目的達成のために以下の三つの課題を設定した。**課題Ⅰ**在地社会に残された風説留類の所在調査および所在目録の作成を行う。在地社会残された風説留には実際にはさまざまな形態があるが、在地社会において幕末維新期の情報集といえるものが、どのような形で、どのくらい残されているのかを特定の地域を選定して調査を行う。当面は関東近県から検討を始める。**課題Ⅱ**既に検討を重ねている下総国結城郡菅谷村の豪農大久保家が収集した風説留23点について翻刻作業を行い、情報１点ごとの史料学的検討を行う。具体的には情報の内容、収集ルートの検討、より原典に近い史料との比較検討、編集のプロセスなどについて明らかにする。**課題Ⅲ**複数の家の風説留類との比較研究を行う。まず大久保家と最も関わりの深い土浦の国学者色川三中が収集した情報記録『草乃片葉』（静嘉堂文庫所蔵）との比較検討を行う。さらに大久保家の幅広い親戚関係をはじめとして、課題Ⅰにおいて調査収集した風説留類との比較研究を行う。特に、ペリー来航に代表される幕

末期の対外情報や、安政大地震などの災害情報、幕末の政治事件など特定のテーマにそった情報の広がり方についての比較検討を行う。

４．研究成果

本研究では、**課題Ⅰ**在地社会に残された風説留類の所在調査および所在目録の作成、**課題Ⅱ**豪農の風説留の翻刻作業、**課題Ⅲ**複数の家の風説留類の比較研究という三つの課題を立てている。ここでは、それぞれについて述べていきたい。

(1)課題Ⅰについては、今回の研究では当初の予定通りにはいかず、今後の課題が多くのこされた。しかし、ある程度の史料収集が行えたことは、今後の展開に希望をつないでいると考えている。作業としては、関東における在地に残された古文書目録から、「風説留」「風聞集」「新聞」に類するもののピックアップ作業から開始したが、必ずしも、期待した内容のものではなく、表題もまちまちで、断片的なものも数多くみられ、むしろ内容を限定して追跡するほうが効果的と思われた。そこで、今後は、全国的に大きな影響をあたえた異国船に関する情報、阿蘭陀風説書・和蘭別段風説書などの通常では在地にありそうもない対外関係情報に絞って、在地社会における残存状況を把握し、その情報収集の実態を検討してみることを今後の課題とすることにした。

(2)課題Ⅱについては、既に検討を重ねている下総国結城郡菅谷村の豪農大久保家が収集した風説留の内、『筆熊手―浦賀紀行　応接の噺　角力』『筆熊手―異賊我意　長崎有様』『筆熊手―異国沙汰・勝手の噺』『寝覚廼雁　五　地震蒸気車』『寝覚廼雁　六　海防　条約　諸君文』『寝覚廼雁　七　書簡類』の七冊について終了したので、報告書に掲載した。従来部分的には紹介し、取り上げてきたが、一点ごとに丁寧に解読し、読み進めていくことによって、個々の情報の内容や、性格、情報の広がり方などが明らかになり、改めて、在地社会における黒船情報の内容の豊富さを確認した。また、その一方で、このような情報記録が、この地域に限ってみても一般百姓の誰でもが残していたわけではないことから、大久保家の特殊性についても、今後検討する必要を感じた。当面はその人間関係について再検討する必要性を感じた。また、参考資料として、情報記録一覧を作成した。従来の研究では、部分的に取り上げていたが、今回の調査ではじめて『続筆熊手』の存在を明らかにし、その内容も含めて全体が一覧できる表を作成した。これによって全体を見渡すことが可能となり、新たな研究課題が出てくることになったことが、今回の研究成果のひとつであるといえる。

(3)課題Ⅱの史料学的検討作業の中で、新たな研究成果として、「大久保家の蝦夷地情報について―近江商人との関わりに注目して―」を発表し、大久保家と近江商人との関わりと、そこから蝦夷地の情報が入ってきていることが明らかとなった。ここでは、まず、１で、大久保家の情報記録である「風説留」の中から、現在明らかになる蝦夷地に関係する史料を紹介した。２では、その中で特に近江商人からもたらされた書状を紹介し、蝦夷地情報に注目して検討した。３では、大久保家の日記から大久保家と近江商人との交流について検討した。以上にみられるように、「風説留」の内容を丁寧に読み解くことを通じて、下総国の豪農が蝦夷地に高い関心を抱いていたことが具体的に明らかにできたことも、今回の大きな研究成果である。

(4)課題Ⅱを進めるにあたり、最初に検討すべきテーマとして、そもそも大久保家の情報記録である『筆熊手』や『寝覚廼厂』がどのようにして成立したのかという問題がある。
現在は、情報をテーマにした研究史を踏まえた上で、このような情報記録を「風説留」と仮に称しているが、実際には、「風説」には該当しない内容のものも多く含まれている。このような、情報記録がどのような性格をもつものなのか、ということは今後意識的に検討をする必要がある。ただし、そのための手がかりは案外少なく、いつ・誰が・なんの目的でこのような冊子を作成したのかということはよくわからない場合が多い。本書が主に検討した大久保家の『筆熊手』についても同様であり、このような題名がつけられた意味や、中心となって編纂した人物についても大久保真菅・忠善父子のいずれかであることは間違いないと思われるが、それに協力したものも大勢いたと思われ、実際のところはっきりしたことはわからない。しかし、わずかな手がかりをもとに、そのことを検証する作業は、やはりしておかなければならない。今回の研究では、「下総国結城郡菅谷村大久保家の『筆熊手』の成立について」というテーマで論考を書き、『筆熊手』がどのようにして成立したのかという点について大久保家の日記や人間関係をもとにその成立の意味を検証してみた。その結果、中山信名編『筆熊手』と同じ題名がつけられていることについて、大久保真菅が色川三中への入門を契機として、当時色川一門が進めていた中山信名の遺稿整理に携わり、その業績に触れたことが一つの契機になったのではないかと推測した。もうひとつの情報記録である『寝覚廼厂』についての検討は、今後の課題として残った。

(5)課題Ⅲでは、比較検討材料として、江戸で本屋を営んでいた藤岡屋の『藤岡屋日記』(三一書房　1989~95)、駿州駿東郡原宿問屋年寄役を務め大地主でもあった植松家の『原宿植松家　日記・見聞雑記（沼津市史叢書三）』(沼

津市教育委員会 1995)、『原宿植松家　日記・見聞雑記二（沼津市史叢書五)』(沼津市教育委員会 1998)、相模国高座郡柳島村の村名主で柳島湊の船主でもあった藤間家の『藤間柳庵「太平年表録」(茅ヶ崎市史史料集　第五集)』(茅ヶ崎市 2007)、『史料叢書「幕末風聞集」』(馬場弘臣 2010) などの関東近県で、現在活字化されて比較的入手しやすいものや、江戸の本屋山城屋忠兵衛の『文鳳堂雑纂』（雄松堂ﾏｲｸﾛﾌｨﾙﾑ)、土浦の国学者色川三中の情報記録『草乃片葉』などの複写などで収集したものを使用して、対外関係に絞った検討を行った。特に在地社会における上層民である大久保家・植松家・藤間家の三家の情報記録を比較検討した結果、次のようなことが明らかとなった。

まず、それぞれの「風説留」の収録期間と件数でみた場合、大久保家は嘉永五年から慶応三年まで 217 件余、植松家は嘉永二年から慶応三年まで 536 件、藤間家は嘉永六年から明治五年まで 184 件の情報が記録されている。件数でみると、東海道の宿場の問屋をつとめた植松家は最も情報量が多く、常に安定的にコンスタントに情報が入ってきたことがわかるが、そのうち対外関係が占める割合をみていくと、大久保家 75%、植松家 25%、藤間家 17%となり、家により特徴が現れた。このことから、この時期の在地社会の「風説留」、すなわち情報の集め方には、各家々の意識や関心、地域や立場の違いが大きく反映されていることが指摘できる。また、特にペリーやプチャーチンが来航した嘉永六・七年に絞ってみていくと、対外情報全体の中で占める割合は、大久保家は 84%と高く、植松家は 40%、藤間家は 60%ほどであった。このことから、いずれも嘉永六・七年の黒船来航の衝撃は大きかったものの、大久保家は特に強い衝撃を受け、組織的な情報収集が行われていた可能性を示している。特に、対外関係情報が「風説留」の八割近くを占め、全体でみても六割が嘉永六・七年の情報であることをみても、大久保家の「風説留」がペリー来航情報を軸に収集されていることがわかる。すなわち、特定の時期に特定の人間関係を通じて集中してあつめられた情報であること、またその収集された情報は必ずしも年代順・内容別に整理されたものではなく、編集作業が未完成であり、同時性が高いことも指摘できる。

また、「風説留」の中の対外関係のうち、外国書簡と記載されるオランダ・ロシア・アメリカ使節などからもたらされた書簡の翻訳したものについて比較してみると、植松家は外国書簡そのものの記載が少ないが、嘉永三年のオランダ書簡などがみられることから、他家よりも早くから海外情報に接する機会が多かったことがわかる。またその中でもロシア船に関する嘉永六年癸丑七月「魯西亜船長崎入港願書写」やロシア書簡など大久保家には見られないものがみられ、アメリカ関係よりもロシア関係の記録が体系的に残されている。これは、この地域が安政の大地震で被害にあったロシア船の代船を製造した戸田村と関わりが深いことも関係していると考えられ、情報の地域的特徴が良く表れている事例である。大久保家の嘉永六・七年の外国書簡の記録は、アメリカ書簡だけでなく、オランダ書簡・ロシア書簡とも、平均的に入手されており、他家ではあまり見られない「漢文和解」が多く記録されているのも特徴のひとつである。これは、他家には見られない情報ルートをもっていたためだと思われる。外国書簡については、その翻訳過程も含めて、今後どのようにして在地社会にまで広まったのかについての検討が必要であるように思われる。また、幕府によって公開されたアメリカ国書をもとに建白された「諸家上書」の記録をみると、三家の中では大久保家が最も多くの上書を収集し記録しており、また江戸の情報屋として膨大な情報を収集していた藤岡屋の日記と比較しても、同程度に多いことがわかり、しかも学問所関係者が多くみられることも特徴としてあげられる。この点からみても、大久保家の情報収集ルートについては、学問所の関係者に注目して検討する必要がある。

(6)本研究の成果として報告書を作成し、発表論文編と史料編としてまとめた。巻末には、大久保家の情報記録全体の一覧表と、色川三中の情報記録の一覧表を掲載した。色川三中の情報記録の中には、大久保家から提供された情報が多く掲載されており、相互に情報交換を行っていたことが推察される。しかし、それだけではなく、それぞれが独自の人間関係を形成し、情報を収集していたことがその内容からもわかり、今後は、「風説留」のさらなる詳細な検討が必要となる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）

①岩田みゆき「下総国結城郡菅谷村大久保家の『筆熊手』の成立について」(『青山史学』33 号 2015 年、45～62)

②岩田みゆき「大久保家の蝦夷地情報についてー近江商人との関わりに注目してー」(『青山史学』31 号 2013 年、33～45)

〔図書〕（計　１件）

①岩田みゆき『平成 23 年度～27 年度　科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（ｃ）研究成果報告書　在地社会における「風説留」の史料学的研究』平成 28 年 3 月

６．研究組織

(1)研究代表者

岩田みゆき（IWATA,Miyuki）
青山学院大学・文学部・教授
研究者番号：４０３６５０１０